

Title	中世カタロニアの寓話集「獣の書」(試訳)(1)
Author(s)	三原, 幸久
Citation	大阪外国語大学学報. 41 p.41-p.57
Issue Date	1978-02-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80699
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

中世カタロニアの寓話集「獣の書」(試訳)(1)

三 原 幸 久・訳

Traducción Japonesa del “Llibre de les Bèsties”,

Fabulario Medieval Catalán (1)

por Yukihiisa Mihara

Este artículo es la traducción al japonés del “Llibre de les Bèsties” por Ramon Llull, uno de los eruditos representantes del mundo cristiano medieval. El “Llibre de les Bèsties” o el Libro de las Bestias en castellano es una obra interesante en el estudio comparativo de las narraciones tradicionales y los cuentos populares, porque tiene una relación estrecha con el ciclo del “Calila y Dimna” en sus episodios intercalados comunes en ambas colecciones, con el ciclo del “Roman de Renard” en el nombre del protagonista “Na Renart” y algunos otros incidentes. Añadiré a la traducción unas notas comparativas con las versiones francesa del siglo 15 y castellana del siglo 18, y al final de mi artículo pondré algunas observaciones sobre el origen y los cuentos y otras versiones semejantes en la literatura hispánica de cada uno de los episodios intercalados en esta historia.

以下の訳文はラモン・リュイ Ramon Llull (ライムンド・ルリオ Raimundo Lulio — イスパニア語での名称, 以下〔西〕と略す) による教訓的説話集『獣の書 Llibre de les Bèsties』(Libro de las Bestias〔西〕)の試訳である。筆者はイスパニアの説話・昔話を研究する立場から, 「狐物語 Roman de Renard」サイクルと「カリールとディムナ Calila y Dimna」サイクルの両者にまたがる興味深い作品であるこの書物を翻訳の対照として選んだ。

先ず最初に, 中世キリスト教世界が生んだ最も偉大な文化人の1人とされる Llull の経歴を簡単にのべよう。Llull は1233年の始め頃, アラゴン王国の征服王ジャウメ1世 (Jaume I, el Conqueridor; Jaime I, el Conquistador〔西〕1213—1276) 治下のマヨルカ島パルマ Palma でマヨルカ島の再征服 (モロコ人からの領土回復, 1227—1229) の直後にこの地に居ついた貴族の家に生まれた。14歳でジャウメ1世の小姓として宮廷に入り, 後, ジャウメ王子 (後のマヨルカ王) の家庭教師に任命され, その後王子の執事となった。Llull は青年時代, 富裕な貴族の息子として贅沢で享乐的な生活を送り, 陽気で活動的な若者であり, 1257年貴族の娘 Blanca Picañy と結婚し, Domènec と Magdalena の1男1女をもうけている。ところが, 30歳という

人生の絶頂期に突然宗教的な回心が起こった。Llull 自身が書いているところから従えば、恋の歌を作っている時、十字架にかけられたキリストが現われて回心をうながし、さらに少しして、聖アシジのフランチェスコについての説教が回心を決定的にしたと言われる。しかし Llull の回心についてはかなり有名で伝説化されている。例えば、16世紀フランスのブラントーム Seigneur de Brantôme の『艶婦伝 Vies des Dames Galantes』⁽¹⁾によれば、Llull は貴婦人に恋をし、言い寄った揚句、最初の密会の際、美しいその恋人が胸間を露わすと、乳房に15枚の膏薬が貼られ、それを1枚1枚はがすと恐ろしい乳癌の腫瘍があった。恋人は目に涙をためて、癌腫の痛みと、命が旦夕に迫っていることを訴えた。Llull は美しい容貌の下にあるこのような醜さと苦しみに驚き、神に平癒を祈願すると共に、無情を悟って顯職を退き、修道院に入ったという物語である。

Llull は回心を決意すると財産を処理し、家族関係を解消して、完全に自由な贖罪と宣教の生活を始めた。サンティアゴ・デ・コンポステーラ、ローマ、エルサレム等の聖地を巡礼の後、バルセローナにもどり、聖ラモン・デ・ペニャフォール Sant Ramon de Penyafort の勧めに従ってパルマに住み、著述に従った。その後、マヨルカ島中央の Miramar に修道院を建設し、13人の修道士とイスラム世界への布教のため近東の諸言語を学んだ。その後、地中海沿岸の全地域に旅行して異教徒の間を宣教し、バリ大学で神学を講じたり、Viena de Delfinal の宗教会議(1311~12)に出席する等の活躍をしたが、1315年12月チェニスに渡り、1316年3月に歿した。イスラム教徒の投石によって殉教したとも伝えられる。死後、福者(Beato)に列せられた。

Llull の著作

Llull の作品は散文、韻文の両方にまたがり、神学、哲学、詩作品、文学論、物語、錬金術とあらゆる分野に及び、243の作品の名前が知られ、使用言語もカタロニア、ラテン、アラビアの3か国語に及んでいる。ただアラビア語の作品は全く現存していない。Llull は神の知識を民衆の間に広めることを望み、従来、ラテン語でしか書かれなかった哲学や神学の著作を話し言葉(ロマンス語)で書くことを企てたが、哲学が始めて書かれたロマンス語はカタロニア語であると、カタロニアの人達は誇りにしている。Llull はカタロニア文語の創始者とみなされているが、散文作品には、当時のカタロニア国語を修辭的に磨き上げて使用し、詩作品には、中世カタロニアの知識人の習慣に従って、プロバンス語化したカタロニア語を使っている。言語学的に Llull の諸著作を研究した、同じマヨルカ島出身の言語学者モイ教授 Francesc B. Moll によれば、全作品に使用されている単語は7000語で、語彙的には決して豊かではない。その52%は当時の国語、18%はラテン語からの外来語^{ラティニスム}、20%は国語の単語に接頭辞、接尾辞をつけて造語したもの、7%は Llull のみがか使用した新語、1%はプロバンス語からの外来語、2%は固有名詞で、アラビア語の知識にもかかわらず、アラビア語からの外来語はほとんどない。

Llull の代表的なカタロニア語の作品としては、騎士道を描いたものとしては『騎士道の書 El Llibre del Orde de Cavalleria(El Libro de la Orden de Caballería(西))』、神秘文学としては

『神の友と神に愛されたる者の書 El Llibre d' Amic e Amat (El Libro de Amigo y Amado〔西〕)』物語の文学としては『エバストとブランケルナの書 El Llibre d' Evast e Blanquerna (El Libro de Evasto y Blanquerna〔西〕)』それに『獣の書』を1部に含んでいる『驚異の書』等がある。

『驚異の書 El Llibre de Meravelles (El Libro de Maravillas〔西〕)』

『驚異の書』はまたの名を『驚異のフェリックスの書 El Llibre de Fèlix de Meravelles』とも『フェリックスの書 El Llibre de Fèlix』とも呼ばれ、1289年頃パリで書かれた Llull の物語文学の傑作の1つである。これは Fèlix という1人物の冒険談で、彼はあらゆる土地を旅し、上は王子や騎士から下は身分いやしい下男まで、信心深い修道士から身を持ちくずした放蕩者まであらゆる人物に出会い、また、ありとあらゆる驚異的な出来事を見て回り、自分の経験と、落ち込んだ危険や苦しみ、そこから神の恵みによりいかに脱出できたかを物語るのがその内容である。Fèlix が会会う人物は、それぞれ、多くの逸話や寓話を物語るもので、この大きな物語の枠の中に幾多の小さい挿話が入りこむという枠物語形式をとっている。

『獣の書』

『驚異の書』の第7の書は『獣の書』と呼ばれ、その全体が1種の大きな挿話であり、他の部分とは全く独立した物語で、研究者によれば、全体よりも早く、多分1286年以前に執筆されていたものと思われ、悲観主義的な政治諷刺の動物寓話を構成している。内容については以下の訳に譲るが、ライオン王の宮廷で、狡猾な狐が王に取り入って寵臣となり、他の動物の家来を次ぎ次ぎと落とし入れて行く『獣の書』の構成と、主人公の狐の名前がカタロニア語の「狐」を表現する *volp*, *guineu*, *guilla* 等の語を使用せず、*Na Renard* という、フランスの『狐物語』の主人公 *Renard* と同じ名前を使用していることは、本物語が『狐物語』の影響の下に作られたためと思われ、また他方、挿入された挿話のうち10個は『カーラとディムナ』と関係を持ち、『獣の書』の枠物語の40章が『カーラとディムナ』の「ライオンと雄牛」の物語によったものとも思われ、本書と『カーラとディムナ』との関係は明らかである。個々の挿話の原話、中世イスパニア説話集に見いだされる類話等、比較説話上の解説は本稿末尾の「挿話の比較」の項に譲るが、Llull が原本に使った『カーラとディムナ』は *Ibn-ul-Moqafa* 訳のアラビア語版なのか、それ共、1253年にカスティリア王国の *Alfonso* 王子(後の賢王)の命で訳されたイスパニア語訳なのかは興味あるところである。従来はアラビア語訳と考えられていたようであるが、年代的に見て、また Llull の活発な知的活動から見て、イスパニア語訳を見る機会がなかったことは考えられず、イスパニア語訳によった可能性もまた否定できないと思われる。

『獣の書』の写本・刊本・翻訳および筆者の訳の原典

『驚異の書』の写本は、14世紀のものが3種、15世紀のものが3種、17世紀のものが4種存在する。また刊本は1750年出版のもの以後5種類(内1種類は『獣の書』のみ)があるが、筆者は最も権威あるとされる Galmés 校訂版、すなわち *Llibre de Meravelles, a cura de Mn. Salvador*

Galmés, 4 vols (Els Nostres Classics, Volum 34 ~ 37) 1931 ~ 1934, Editorial Barcino, Barcelona を原典として使用した。Galmés 校訂版は1367年 Barcelona で筆写の記載があり、現在 Palma のリュイ古代協会 Societat Arqueològica Lulliana 蔵の最古の写本(A)と、1458年 Vilafranca で筆写の記載があり、同じ協会蔵の写本(B)を校訂して編集したものである。

他国語に訳された『驚異の書』については、ラテン語訳(14世紀)とフランス語訳(15世紀)および2種類のイタリア語訳(15世紀と16世紀)の写本があり、刊本としては独、英、仏、イスパニア語訳がある。筆者は本試訳の参考として、Ramon Llull: Obras Literarias, 1948, Editorial Católica S. A. に含まれている1750年 Palma 発行のイスパニア語訳と、15世紀のフランス語訳の写本(パリ国立博物館蔵)の『獣の書』の部分のみを刊行した Raymond Lulle: Le Livre des Bêtes, 1964, Librairie C. Klincksieck を参考とした。

フランス語訳はカタロニア語の原本と細かい語句の違いのほか大きい違いはないが、イスパニア語訳はかなり大きく原文から離れ、時には原文にない文章がそっくり挿入されている場合もあり、概してイスパニア語訳の方が長文で説明的に語句を補っている場合が多い。

(試 訳)

第7の書 獣 達 に つ い て

獣達についてのべた第7の書が始まる。

フェリックス Fèlix は哲人に別れを告げ、樹木と泉の多くある谷間を歩いて行った。谷間の出口で長いあごひげと長い髪の毛をもち、粗末な衣服を身につけた2人の男と出会った。フェリックスがその人々にあいさつすると、その人達もフェリックスにあいさつを返した。「今日は」フェリックスは言った。「あなた方はどこからいらっしゃったのですか。あなた方の服装を見ますと、どこかの教団の方のようにお見受けいたしますが、どこの教団の方々にいらっしゃいますか。」「はい、あなた様」2人の男は言った。「私共は遠い土地から参りました。そうして、近くにあるあの平原を通してここへ参りました。あの平原では王を選ぼうとする野獣達の大きい集まりが開かれていました。私共の教団は『使徒教団 Orde dels Apòstols』と呼ばれ、私共の服装と貧しさは、使徒がこの世に住んでいらっしゃった間にしておられた托鉢の生活を表わしているのです」

フェリックスは2人が使徒教団のように誉れ高い教団に属していられると知ってとても驚き、次のように言った。「使徒教団はすべての教団の上にあります。教団にある者は死を恐れてはならず、誤りに落ち入った不信の人々に正しい道を、罪に落ち入ったキリスト者には行いと説教によって聖なる生活の模範を示さねばなりません。教団にある者は全力をつくして、善を行うよう絶えず人々に説き聞かせなければなりません」このようなことや、その他多くのことをフェリックスは使徒教団の2人に言った。「あなた様」と2人は言った。「私共は使徒がなされたような誉れ高い生活にふさわしい者ではありません。しかし、使徒の御言葉の形だけでも真似よ

うとしているのです。その形を服装と貧しさと、世界中、ある土地から別の土地へと遍歴する巡礼の生活に現わしています。私共は神に望みをかけています。神はこの世で聖なる生活を送る人々、すなわち使徒教団に属する者達、学問や言葉を知り、神の助けを得て、不信仰の者には説教して改宗させ、キリスト者には生活と聖なる言葉によって模範となり得るような人々をお送りくださいます。このように、神は私達に憐みの心を持たれ、またキリスト者も使徒の姿をした私共の来訪を待っているのです」

2人の言葉にフェリックスはとても喜び、その教えに長い間感泣し、次のように言った。

「ああ、主なる神イエス・キリストよ。常に使徒の中にあり、あなたが愛し、知識を得るために労苦をも死をも進んで耐え忍ばれる神聖な情熱や献身がいったいどこに見られるでしょうか。すばらしい主なる神は、使徒の生涯の形を真似た聖なる生活にあなた方がすぐ到達なさることをきっと喜ばれることでしょう」

こう言った後、フェリックスはこの聖たる人々に別れを告げ、獣達が王を選ぼうとしている場所へ行った。

〔第37章〕 1. 王の選出について

きれいな小川が流れている美しい平原に、王を選出しようとする多くの獣達がいた。多くの者達は結束してライオン ⁽³⁾ el Leho を王に推戴しようと考えていた。しかし雄牛 lo Bou はその選出に強く反対し、次のように言った。「諸君、王の高貴さには、偉大であって、かつ謙虚であり、他人に害を与えない美しい人物こそが適当であります。ライオンは偉大な獣でもなければ草食獣でもなく、他の獣を食べる肉食獣であります。ライオンはその叫び声で我々すべてを恐怖に震えあがらせるような言葉と声をしています。だから、私の忠告は、諸君に雄馬 lo Cavall を王として選んでほしいということなのです。雄馬は偉大で美しく、謙虚な獣であります。雄馬は軽快な獣であり、高慢な態度でもなければ肉をも常食にしません」。鹿 ⁽⁴⁾ el Servo やノロ鹿 ⁽⁵⁾ el Cabriol や羊 ⁽⁶⁾ el Moltó や、草を食べて暮らすその他のすべての獣達は雄牛の言葉をととても歓迎した。しかし狐 Na Renart は演説しようとするみんなの前に進み出て、次のように言った。「諸君」と狐は言った。「世界は神によって作られました。神は、人間が知られ愛されるようにと世界を作られたのではなく、神が人々に知られ、愛されるようにとの意図で作られたのです。そこで、その御意思に従えば、人は獣の肉と植物を食べて生きているにもかかわらず、獣が人に仕えることを神は望んでいただけるのです。さて、皆様、肉を食べる故にライオンを嫌う雄牛の勧めに従わないでください。神が生物に与え、課せられたきまりと秩序に従ってください」。すると、また雄牛がその仲間と共に進み出て、狐の言葉に反対し、「雄馬が草食であるその故に雄馬を王にすべきです。雄馬とその仲間が王を選ぼうとするその意図は正しいもので、もしその意図が間違ったものであったなら、仲間達は自分達が食べるのと同じ草を食べる馬を王にしようなどとはしなかったことでしょう。諸君は王の選出についての狐の言葉を信じてはなりません。というのは、狐自身がいちばんライオン

を王にしたがっています。それはライオンの高貴さによってではなく、ライオンのそばについて、食い残して暮らし、ライオンの行う狩猟に随行して食べ物を手に入れたいためなのです」とのべた。

お互いにいろいろと言い合って、会議が混乱しているうちに選出は始められた。自分が王に選ばれたいという希望を持っていた熊⁽⁷⁾ l'Ors, ひょう⁽⁸⁾ el Leupart, 雪ひょう⁽⁹⁾ la Onça は、どの獣が王となるのにいちばんふさわしいか決められる時まで会議を延期すべきだと発言した。狐は、熊とひょうと雪ひょうが会議を延期しようとするのは、それぞれ自分達が王になりたい希望を持っているからだとわかっていたので、みんなの前で次のように言った。

〔挿話1〕

「ある大伽藍で司教の選出⁽¹⁰⁾が行われ、僧会議員の間で意見が一致しませんでした。何人かの僧会議員は知識が深く、有徳の誇れ高いその教会の聖器係僧⁽¹¹⁾を司教⁽¹²⁾に選ぼうとしていました。助祭長は司教に選ばれたい希望を持っていましたし、神学教師も同様でした。そこで、聖器係僧の選出には反対し、外見は美しいが何の知識もない単純な僧会議員を司祭に選ぶことに同意しました。その僧会議員は性格が弱くとても好色でした。僧会議員達はみんな助祭長と神学教師の言葉にたいそう驚きました。会議場内にいた1人の僧会議員はこう言いました。『もしライオンが王になれば、熊と雪ひょうとひょうはその選出に反対したので、常に王の怒りに触れるだろう。もし雄馬が王になれば、ライオン⁽¹⁴⁾は何かにかこつけて王を怒らせるだろう。そうなれば、ライオンほど強い獣でない雄馬はどうして復しゅうされないですむだろうか。』〔挿話1終り〕

熊と雪ひょう⁽¹⁵⁾とひょうは狐が語った寓話を聞いてライオンをととても恐れ、その選出に同意し、ライオンが王になることを望んだ。熊と他の肉食獣の力によって、草食獣の反対にもかかわらず、ライオンが王に選ばれた。ライオンはすべての肉食獣に、草食獣を食べて生きる許可を与えた。

ある日、王は会議場に臨席し、その宮廷の法律を定めようとしていた。王と諸侯達はその日、一日中、朝から晩まで会議場にいたので、飲み食いができなかった。会議はなおも続き、ライオンと仲間達は空腹を感じ、王は狼 el Lop と狐に、何か食べ物はないかと尋ねた。すると2匹は、狩をするにはもう時間が遅いが、このほん近くに雄牛の仔の子牛 el Vadell と雄馬の子の仔馬 el Polli⁽¹⁶⁾ があるので、十分に食べることができますと答えた。そこでライオンはその場所に使いをやって仔牛と仔馬を呼び寄せ、2匹を食べてしまった。雄牛と雄馬は息子の死を知ってとても立腹し、人間の所にやって来て、人間に仕え、主君が自分達に対して行った裏切りに復しゅうしようとした。そこで人間は馬に乗り、牛に耕作をさせた。

ある日、雄馬は雄牛は出会い、互いに近況を尋ね合った。雄馬は主人に仕えるのに非常に疲れている。主人は一日中私の上に乗って、昇ったり降ったりして走らされている。その上昼も夜もつながれているのでと言った。馬は主人に仕える今の生活から抜け出し、ライオンの支配下にもどりたいと強く望んでいた。しかし、ライオンは肉食獣でもあるし、またかつて自分を王にしようという声もあったので⁽¹⁷⁾、ライオンが支配している土地へもどるのをちゅうちょしているのだ。馬の肉を食べるライオンの餌食になるよりも、馬肉を食べない人間に仕えて働く方がましだと言

った。

雄馬が雄牛に自分の状態を言い終ると、雄牛は、自分には一日中、土地を耕作するつらい仕事があり、自分の耕す土地が生み出す小麦を主人は食べさせてはくれず、耕作の合い間に、すきのくびきから抜け出せたり、離してくれた時に羊や山羊が食べ残した草を食べるだけだと言った。雄牛は自分の主人を非常に悪く言ったので、雄馬はできるだけ彼を慰めてやった。

雄牛と雄馬がこのように話している時、1人の肉屋が、雄牛に充分肉がついているかどうかを見に来た。雄牛の主人が売り払おうと思っていたからである。雄牛は雄馬に、私の主人は私を売り払い、殺させて人間に食べさせようとしていると言った。雄馬は雄牛に、あなたの主人はきっとあなたの奉仕に仇で報いるだろうと言った。長い間2匹は泣き合った後、雄馬は、逃げ出して自分の故郷にもどりなさい。恩知らずの主人に仕えるより、死の危険にさらされる方がまだましだからと雄牛に忠告した。

【第38章】 2. 王の勧めについて

ライオンが王に選ばれた時、民衆の前ですばらしい演説をして次のように言った。「諸君、皆様の御意思によって私は王になりました。王の職務は非常に危険なものであり、苦勞の多いものであることは皆さんもご存知だと思います。王の犯した罪によって、神はしばしばこの地上に餓えや厄病や死や戦乱を送られているからです。また同様のことは民衆の罪によっても起こるのです。それ故、王にとって統治することは非常に危険なことです。また王の統治は全民衆にとっても危険なことなのです。自分自身を治め、そして民衆を治めることは王にとって非常に大きい苦勞なのです。そこで、私をもまた私の民衆をも救うために私を助け、助言してくれる顧問官を私に与えてくれるようお願いする次第です。そしてあなた方が私に与えてくれる顧問官は賢明で忠実な者で、顧問官として王の側にいるのにふさわしい人物であるよう望む次第であります」

王が言った言葉は全諸侯や会議のすべての人々を喜ばせ、すべての者は自分達が行った王の選出の結果を幸運なものと考えた。そうして、熊、ひょう、雪ひょう、蛇 la Serp、それに狼が王の顧問官として一致して選ばれた。これらの動物達は議員の面前で出来る限り忠実に王に助言することを誓った。

狐は王の顧問官に選ばれなかったので非常に不愉快だった。そこで議員の前で次のように言った。「福音書に書かれているところによれば、天上と地上の王であるイエス・キリストは単純で謙虚な人々との間に友情と交友を保とうと望まれました。それ故、純真で貧しい人達であった使徒をお選びになりました。このため使徒の徳がますます高まり、ますます謙虚になったのです。諸君全員とは反対に、顧問官が力においても血統においても高慢にならず、王と等しくなろうとする野望を抱かないために、王は単純で謙虚な獣を顧問官に持つべきであり、このようにすれば、単純な獣や草食獣にも希望と謙譲の模範となりうるものと私は考えます」。狐の言った言葉は、象 l' Aurifany、猪 el Senglar、牡山羊 el Boch、羊 el Moltó その他の草食獣を喜ばせた。そこでこ

れらすべての獣は、雄弁であり、偉大な知識を持つ狐こそ王の顧問官となるべきであると王に申し上げた。一方、狐も、象、猪、鹿、羊が王の顧問官となるべきであると進言した。

狐が顧問官になることは、熊、ひょう、雪ひょうにはたいそう不愉快であった。他のどんな獣よりも狐が王の選出に大きい役割を果たしていたので、狐が雄弁と狡猾さで王にざん言をしないかと恐れたからである。「陛下」とひょうは王に言った。「あなたの議会には雄鶏 el Gall がおります。鶏は姿が美しく賢明で、多くの雌鶏の主人になることができます。鶏は曙に澄み切って美しい声で鳴き声を上げます。そこで狐よりもずっとあなたの顧問官になるにふさわしいと存じます」。象は、雄鶏が王の顧問官になることに賛成し、どのように王妃を支配し、服従させようかという模範を示し、王を朝早く目ざめさせて、神に祈りを捧げることができます。しかし狐も賢明な獣で多くのことを知っているのも、王の顧問官として適当でしょうと言った。ひょうは王の顧問官中に生まれつき憎み合っている 2 匹が入るのはふさわしくありません。持っている憎しみの心をもって王の顧問団を混乱させるかも知れませんからと言った。もう一方では狐が口を開き、王の顧問団に、象、猪、羊、鹿のように美しくて大きい動物が入るべきです。王の前では姿の美しさこそふさわしいことですからと言った。

王は狐とその仲間達が議員になり、また顧問官になることを望んだ。そうして、ひょうが王にそっと次のように言わなかったならば、その事は実現していたことであろう。

〔挿話 2〕

「陛下、ある伯爵が王と戦いましたが、王ほどの力を持っていなかったのも、王との戦いに計略を用い、ひそかに多額の金を王の大臣に与え、王が戦いに関して大臣に与えるすべての命令を知らせてくれるよう頼みました。そこで王の大臣は伯爵との戦いが終わらないよう王の力を邪魔立ていたしました」〔挿話 2 終り〕

ひょうがその言葉を終えた時、ライオンはその類似に気がつき、雄鶏を顧問官にしたが、狐を顧問官にしようとはせず、こうして、象やその仲間の草食獣に王やその仲間の意図を感じられないようにした。

〔第39章〕 3. 狐が王に企てた叛逆について

王の顧問官になれなかったことを、狐とその仲間はたいそう不愉快に思い、その時から狐は心の中に叛逆の気持ちを抱き、王の死を望んだ。そこで狐は象に次のように言った。「今日より肉食獣と草食獣の間に大きい敵意が生まれるでしょう。それは、王とその顧問官⁽²⁴⁾達は肉を食べ、王の顧問団の中にあなた方と性質を同じくし、その権利を主張する 1 匹の獣をもあなた方は持たないからです」象は答えて、蛇と雄鶏が王の議会の中に自分の権利を主張してくれると期待している。この 2 匹は肉を食べない獣であるからと言った。狐は答えて言った。

〔挿話 3〕

「昔、ある所に 1 人のキリスト教徒が 1 人のイスラム教徒の奴隷を持っており、とても信用し、

大きな恩恵を与えていました。しかしイスラム教徒は主人と宗教が違う故に主人を快よく思わず、むしろ毎日、どうして主人を殺そうかと、そればかり考えていました。〔挿話3 終り〕

だから、象さん」と狐は言った。「雄鶏や蛇は肉は食べないけれども、あなたや仲間の方々とはたいそう血統が違いますから彼らを信用してはなりません。機会さえ与えられるならばできる限り、あらゆる害悪をあなたと仲間の方々に与えようとしていることは確実なのです」

象は狐が自分に言った言葉に深く考えさせられた。そして、王の選挙と王の顧問官によって自分とその仲間に引き起こされるかも知れない害悪について長い間考えこんでいた。象がこのように考えこんでいると、狐は、王と仲間を怖がりなさんな、あなたが王になりたいのなら、王になれる方法を私が捜してみますからと彼に言った。しかし、象は狐が自分を裏切るのではないか、狐はその性質から言っても、草食獣よりも肉食獣を愛するに違いないからと考えた。そして象は狐に次のように言った。

〔挿話4〕

「ある所で1匹の鳶が1匹の仔鼠をくわえて飛んでいました。そして1人の隠者があの鼠を自分の服のすそに落としてくださるよう神に祈りました。聖なる人物の祈りによって、神はその鼠を隠者の服のすそに落とされましたので、神に美しい乙女に姿を変えてくださるよう再び祈りました。神は隠者の祈りを聞き届けられ、鼠は美しい乙女に変身いたしました。『娘や』と隠者は言いました。『お前は太陽を婿にしたいくないかね』『いいえ、だって、雲が太陽の明るさを隠してしまうからです』そこで隠者は月を婿にしたいくないかと尋ねました。すると娘は月は自分で光を持っていず、太陽によって光っているだけだから嫌だと言いました。『美しい娘よ、お前は雲を婿にしたいくないかね』。彼女はいいえ、風が雲を好きな所に運んで行ってしまうからいやですと答えました。また娘は風も夫にしたいくない。山が風の動きを妨げるから。また山も夫にしたいくない。鼠が山に穴を開けるから。また人間をも夫にしたいくない。鼠をなやますからと言いました。そこでとうとう娘は神に以前そうであったように私を鼠にもどしてください。そうして美しい雄鼠を婿にしてくださいよう神に祈ってくださいと隠者に頼みました」〔挿話4 終り〕

狐はこの寓話を聞いて、象が自分を疑っていることを知り、自分のことをばらしてしまわないだろうかと恐れ、象に言ったと同じように猪に王にならないかと提案した。しかし自分の気持ちをみんなに隠しておくために、あらゆる機会に王になるよう象をそそのかして、次のように言った。

〔挿話5〕

「ある所に、1人の騎士が妻によって1人の美しい息子を得ました。その騎士の妻が死んでしまったので、騎士はすぐに再婚しました。継母は騎士がたいそう愛していた息子を非常に憎みました。息子が20歳になると、夫に息子を家から追い出させる方法を考え出しました。夫に息子が自分に不倫を求めたと言ったのです。夫は妻をたいそう愛していたので、妻の言ったことをすべて信じ、息子を家から追い出し、二度とわしの目の前に姿を見せるなどと言いました。若者は理由も

なく家から追い出され、憎まれたため、父をたいそう恨みました」〔挿話5 終り〕

狐が話したこの寓話によって象は少し元気づけられ、狐が言ったように王になろうとする希望を抱いた。そうして、現在王はこんなに強く、元気であり、たいそう賢明な顧問官を持っているのに引きかえ、狐は小さい獣であり、僅かな力しか持っていない。どうすれば、王が死に自分が王に選ばれることができようかと狐に尋ねた。

狐は次の寓話で答えた。

〔挿話6〕

「ある所では、ライオンが自分達を追いかけ廻して狩猟をしないよう、毎日1匹の獣をライオンに捧げることにすべての獣達は決めていました。毎日、それらの獣達はくじを引き、くじに当たった者がライオンの所に行き、ライオンがその獣を食べるのです。ある日、くじは1匹の野兎に当たりました。その兎は死ぬのが恐しかったので、たいそうゆっくり行き、やっと昼頃にライオンの前に着きました。兎がたいそう遅れ、腹がとてもすいていたライオンは、腹を立てていました。そして、兎にどうしてこんなに遅れたのかと尋ねました。兎は言い訳をし、あちらの、村の近くにもう1匹のライオンがおり、この土地の王だと言って、私を捕えようと追い廻したからですと答えました。ライオンはとても腹を立て、兎が言ったことを本当だと信じ、そのライオンを自分に見せてくれと言いました。兎は先に立ち、ライオンは兎について行きました。兎はライオンをある大きい池へ連れて行きました。その池の水は四方が大きい壁で囲まれていました。兎と共に泉の上に来ると、兎とライオンの影は水の上にうつりました。兎はライオンに言いました。『王様、水の中にいるライオンをごらんください。あいつも1匹の兎を食べようとしています』ライオンは自分の影をライオンだと信じ、そのライオンと戦うために水の中に跳びこみました。ライオンは水の中で溺れ死に、兎はその知恵でライオンを滅したのです」〔挿話6 終り〕

象はこの寓話を聞いて、狐に次の寓話を語った。

〔挿話7〕

「ある王には王の身の廻りを世話している2人の若者が仕えていました。ある日、王が椅子に腰かけており、王の前には多くの身分高い諸侯や騎士達がいました。若者の1人は王の前において、王が身につけていた白い繻子しすの衣裳の上に1匹の蚤しそがいるのを見つけ、王に近づき、衣服の上の蚤を取らせて頂きたいと申し出ました。王は若者に近づく許しを与え、若者は蚤を捕えました。王は蚤を見たいと言われ、その蚤を騎士達に見せて、こんなに小さい動物が不敬にも王に近づくとは驚き入った次第じゃと言われました。そして王はその若者に百ベザンのほうびを与えられました。もう1人の若者は仲間を羨み、次の日、王の衣服に1匹の大きいしらみをつけておき、仲間が言ったのと同じようなことを王に言いました。若者はしらみを王に見せると、王はとても立腹し、王の衣服を清潔に保っておかない罪で汝は死罪に価すると言われ、百の鞭打ちをその若者に与えられました」〔挿話7 終り〕

狐は象が王になるのを恐れていることを知った。そしてこんなに大きい体をした獣がこんなに

も怖がるのかと驚いた。そこで象に次のように言った。

〔挿話8〕

「さて昔、蛇はただ1人の女性であるイヴを陥入れて、アダムやそのすべての子孫に神の怒りをもたらしめました。そこで、もし蛇がイヴにそれほどの害悪を与えられたのであれば、私もその知恵と悪だくみで、王を民衆の怒りの中に陥入れることが充分できるでしょう」〔挿話8終り〕

ここに狐が語ったイヴの寓話を聞いて、象は王に対する叛逆の心を抱き、狐に、あなたが王を殺せばすぐ自分が喜んで王になろうと言った。狐は王の殺害に努力すると言ひ、象は、もし自分を王にするために努力してくれれば、大きい贈物と名誉を与えようと約束した。

〔第40章〕 4. いかにして狐は王の守衛長になったか

王の宮廷では猫が王の侍従⁽²⁹⁾に、犬が守衛長⁽³⁰⁾に任命された。猫は衣服を破る鼠を食べ、姿が王に似ているために侍従になった。犬は遠くから匂いをかぎわけ、吠え、王の元にやって来る人を王に知らせるので守衛長になった。猫と犬が職務に従事している時、狐は王の宮廷にいない雄牛と雄馬を捜しに行き、ある美しい野原で狐は雄牛に会った。2匹はお互いに愉快そうに挨拶をかわし合い、雄牛は狐に自分の近況、すなわち、どのように自分から人間の所に行き、そこで長い間仕えたか、そのあげくの果て、人間が自分を肉屋に売って殺そうとしたかを語った。一方、狐も雄牛に先にのべたような宮廷の状態を語った。

「雄牛さん」と狐は言った。「あなたは何をお望みですか」牛は狐に王の宮廷に行き、自分を売って殺そうとする人間から逃がれたいと言った。狐は牛に次のように言った。

〔挿話9〕

「ある王国には行いの悪い王がいて、もっと邪惡な顧問団を持っていました。王と顧問団の悪行のため、全王国は苦しみと神の怒りの中にあえいでいました。王とその顧問団がその王国に住む人々に行った悪事は数え切れないほどだったのです。王と顧問団がその土地で行った悪行はとても長く続いたので、人々も耐えられなくなりました。こうして、王と顧問団の邪惡な生活と悪い模範の故に人々は王と顧問団の死を望むに至りました」〔挿話9終り〕

雄牛は狐が語った内容によって王と顧問団が邪惡であることを知り、そんな国に行って住むべきかどうか迷った。そこで狐に次のように言った。

〔挿話10〕

「ある町にとってもその職務にふさわしからぬ1人の司教がいました。司教の悪と不誠実さと、教区参事会とその町の人々に与える悪しき模範によって、多くの悪事が続発し、イエス・キリストが使徒とその後継者に与えられた教えに従って司教が行動したならば、有ったであろう多くの善行が失われました。ある日、司教が大きな不正をした後、ミサを唱えに行きました。1人の司教会員は司教の悪事をたいそう憎んでいましたが、その町を出て森に行き、羊飼の中に立ちまじって暮らし、自分の羊を狼に渡してしまう牧者と住むよりも、狼から羊を守る羊飼いと共に暮らす

方がまだましだと言いました」〔挿話10終り〕

牛はこの寓話を話して、狐に、その統治が悪いのなら、その国から立ち去って、王や顧問団の下に暮らしたくはないと言った。「雄牛さん」と狐は言った。「ある隠者が国王にした質問のことを聞かれたことがありますか」。「それはどんな質問ですか」と雄牛は言った。狐は言った。

〔挿話11〕

「ある高い山に、1人の聖人の隠者が住んでいました。その隠者は身持ちの正しい人でした。悪い統治を行っていたその土地の罪深い国王に関する多くの不平が毎日のように隠者の耳に入ってきて来ました。人々はその隠者に多くの悪事を話していました。隠者は王の陥入っている悪い状態を残念に思い、王が正しい姿に立ちもどるよう祈っていました。善良な隠者は自分の僧庵を出て、王の住む美しい都に行きました。『陛下』と善良な隠者は王に言いました。『この世の中で、どのような事が最も神を喜ばせると陛下はお考えですか。隠者の生活でしょうか、それとも、その国民を正しく治める国の生活でしょうか』王はその質問をしばらく考えてから、善良なる王の生活は、隠者の生活よりもより多くの善の源となりうるだろうと答えられました。『陛下』と隠者は言いました。『そのお答を私は非常にうれしく思います。そのお答によれば、悪い王は、隠者が僧庵でなしうる善よりもずっと大きい害を与えるわけです。それ故、私は僧庵を出て陛下のもとに参りました。陛下の王国が正しい状態になるまで、しばらく陛下と共におり、陛下が神を愛し、神の知識と神への恐れを持たれるよう、神の言葉を陛下に告げ知らせるつもりでございます』その隠者は長く宮廷に滞在し、神の良き言葉を伝え、それによって王は正しい道へと立ちもどり、全王国は正しく統治されるようになりました」〔挿話11終り〕

狐はこの寓話を言うてから、雄牛にこう言った。「雄牛さん、あなたはこの隠者に似た獣です。だから、もしお望みならあなたに助言をいたしましょう。それによって私やあなたの主人である王を正しい状態に導き、あなたの行動に多くの善行が続いて起こることでしょう。」雄牛はできる限り努力して善き行動をとり、それによって王とその民衆を正しい状態に導くことを狐に約束した。そこで狐は雄牛に、王と諸侯のいる場所にほど近い美しい牧場に行き、美しい姿にもどり、強そうに吠えられるようになるまで、そこで草を食べたり、休息したりするよう教えた。「雄牛さん、あなたが十分に肥え、力を回復すれば、昼に3回、夜に3回、できる限り力強く吠えてください。その間に王の所へ行ってあなたのことを話しておきましょう」雄牛は狐の教えに従い、狐は王の宮廷へともどって行った。

雄牛は十分に休息し、体も強くなると、強く吠え始めた。狐は雄牛の吠え声を聞くと、王の前に出頭した。そうして雄牛の吠えている間、王の前にいた。雄牛が吠え、王はとても恐ろしくなり、じっと我慢していることも、ふるえをおさえることもできないほどであった。そして王は諸侯の前で恥ずかしい思いをした。それは諸侯が自分を憶病者だと思いはしないと恐れたからである。その場にいた貴族の誰もが王の恐怖に気づいてはいなかったが、ライオンがとても怖がっていた時、狐は王に近づいて行った。狐が王に近づいて行ったので、雄鶏は歌い、犬は吠え

た。王は狐がやって来たことを喜んだ。そして、聞こえて来るあの声の主はどんな動物なのか、あの声から判断すれば非常に大きくて強い獣のように思えるが、それをお前は存じているかと尋ねた。

「陛下」と狐は言った。

〔挿話12〕

「ある谷間に、1人の吟遊詩人⁽²⁷⁾が木にモーロ太鼓⁽²⁸⁾をかけておきました。それが風に吹かれて、木の枝を傷つけました。木の枝を傷つける時、太鼓から大きい音が出て、谷中に響き渡りました。その谷に1匹の猿が住んでいましたが、その音を聞き、太鼓の所にやって来ました。その猿は太鼓の音がとても大きいので、太鼓の中にはバターかそれとも何かよい食べ物が詰まっているのだと信じました。猿は太鼓を砕いてみますと、太鼓の中は空っぽであることを知りました。

〔挿話12終り〕

そうでありますから、陛下」と狐はライオンに言った。「陛下が耳にされるあの声も実体のない、声が示すほどの力を持っていない獣のものなのです。陛下はもっと強く勇気を持ってください。王が怖がり、特にわからない物に恐れを抱くことはよいことではありません」

狐が王にこれらの言葉を言っている時、雄牛は叫び、とても強く吠え立てた。あまりに強く吠え立てたので、その場所中は震え、ライオンも仲間もみんな恐怖で震え上がった。王さえ自分の恐怖を隠し通せず、もしあの獣の強さがあの声通りであるなら、あの場所にいつを置いておくのは危険だと言った。雄牛は再び大声で吠えた。ライオンと全顧問官は恐れた。狐は王の前で楽しそうな表情を見せ、少しも怖がる様子はなかった。王は狐が怖がらないのにととても驚き、他の顧問官も同様に感心した。王は狐に次のように言った。「狐よ」と王は言った。「あんなに大きくて奇怪な声にどうしてお前は怖がらずにおれるのか。お前も知っているように、これほど強いわしも、また熊やひょう、その他のお前よりはずっと強い獣達があの声に恐れているのに」。狐は王に答えて、次のように言った。

〔挿話13〕

「1羽の鳥が岩の上に巣を作っていました。毎年1匹の蛇がその子供達を食べてしまいました。鳥は自分のひなを食べる蛇にととても腹を立てていました。しかし鳥は蛇程強くなかったし、武器をとっても復しゅうできないので、あえて蛇と戦う元気はありませんでした。その鳥は力が足りないで計略の力で蛇に復しゅうしようとしてしました。ある日、王女が果樹園で数人の少女と遊んでおり、金と銀の台で宝石をちりばめた首飾りを木の枝にかけておきました。鳥はその首飾りをつかんで空中を長い間飛んでいました。その首飾りは王女がたいそう好きだったのに鳥に取られたので、ひどく泣き出し、多くの男達はどこに首飾りを落とすかと、鳥の後を追って行きました。鳥は首飾りを蛇の住む場所へ落としました。首飾りを拾いに来た男達は蛇を見つけ殺してしまいました。このようにして鳥は知恵と計略で他人の力を借り蛇に復しゅうを果たしました。

〔挿話13終り〕

ですから、陛下」と狐はライオンに言った。「私はとても知恵があり、計略の才に富んでおります。もし、あのとても強くて恐ろしいような声をしたあの獣を武器の力で打ち勝つことができないなら、知恵と計略の助けを借りて、無残にも殺してしまうことができるでしょう」

狐がこの自分の寓話を語り終えると、これまた王の顧問官の1人であった蛇は次の寓話を語った。

〔挿話14〕

「ある池にいつも大食いをしている1羽の青鷺が住んでいました。もう年をとり、老年故に1度にたくさん魚を取ることができなくなったので、知恵と計略を使おうとし、かえって、その知恵と計略のために身を亡ぼしてしまいました」。ライオンは蛇に、どうして青鷺が身を亡ぼしたのか話してみよと言った。「陛下」と蛇は言った。「青鷺は1日中魚を取ろうともせず、悲しげに池のほとりに立たずんでいました。1匹のかには、青鷺がいつものように魚を取っていないので不思議がり、どうしてそのような考えこんでいるのかと尋ねました。青鷺は泣き出して、長年いっしょに暮らして来たこの池の魚達がかわいそうだ、魚の死と魚の大損害を受けるのが気の毒だ。その池で2人の漁師が魚をとっていて、その池にもう魚がなくなってしまったので、この池に魚取りに来ると言いました。『あの漁師達はとても魚取りが上手で、どんな魚も逃げ切れないだろうし、この池には魚がみんないなくなるでしょう』この言葉を聞いたかにはとても怖がり、その池にいる魚達にこのことを知らせました。すべての魚達は集まって青鷺の前に行き、何かいい方法を教えてくれと頼みました。『別によい方法とてないが』と青鷺は言いました。『ただ1つ、ここから1リーグ離れたある池にあなた方全部を1匹ずつ運ぶことはできます。その池には多くの声と多くの泥⁽²⁹⁾があり、漁師はあなた方に何の害も与えることはできません』すべての魚は青鷺の勧めに従い、毎日、青鷺は何匹かほしだけ魚をくわえては別の池に運んで行くふりをして、丘の頂上⁽³¹⁾に持って行き、そこで運んで来た魚を食べては再び元の所へもどっていたのでした。長い間、青鷺はそうにしていました。何の苦労もなしにこうして魚を取って暮らしていたのです。ある日、かにはその池に運んで行ってくれと青鷺に頼みました。青鷺が首を伸ばすと、かには2本のはさみで青鷺の首をはさみました。首にかにをぶら下げたまま青鷺が飛んでいると、かには青鷺が自分を連れて行ってくれるはずの池がどこにも見えないので不思議に思っていました。青鷺がいつも魚を食べている場所へ来ると、かには青鷺に食べられた魚の骨を見て青鷺が嘘をついていたことを知り、心の中で言いました。『お前に時間があるうちにお前を食おうとしている裏切者に復しゅうしてやらねばならないぞ』そうしてかには青鷺の首を強くしめてへし折り、青鷺は地上に倒れて死にました。かには仲間の所へもどり、青鷺のしていた裏切りを仲間に語りました。こうして青鷺は裏切りのため死んでしまいました」〔挿話14終り〕

「陛下」と狐は言った。「神は、アダムが樂園から追放された時、蛇に呪いをかけられました。アダムに食べるのを禁じていた果物を食べるようイヴをそそのかしたからです。その時から、すべての蛇は見た目に恐ろしく、毒を持ち、蛇によってすべての悪がこの世に持ち来られたのです。

それ故、1人の賢人は王がとてもかわいがっていられたにもかかわらず王の顧問官であった蛇を追放させました」王は狐にその寓話を語るよう言った。「陛下」と狐は言った。

〔挿話15〕

「ある国王が、非常に聖人で賢人である人の噂を聞き、使いをやってその賢人を呼びよせました。賢人が王のもとにやって来ると、王は、自分のもとにいて、王国を治めるための助言を与え、自分の中に見いだす悪徳を治してくれるよう頼みました。聖人は王に良き行いを勧め悪き行いから離れさせるため王のもとにとどまりました。ある日、王はその統治に起きた重大な出来事について助言を求めました。王のそばには、王が他の誰よりも信じて助言を求めている1匹の大蛇がいました。その賢人は蛇を見て、この世で王とはいかなる意味を持つかと尋ねました。王は答えました。『王とはこの世で神に似たもの、すなわちこの地上に正義を保ち、神が王に任ねられた人民を統治する者である』⁽³³⁾『陛下』と賢人は言いました。『神が世界を作られた時、神に最も敵対した動物は何ですか』王は蛇であると答えました。『国王陛下』と賢人は言いました。『陛下がなされた返答によれば、陛下は蛇を憎まねばならないのに陛下の宮廷に蛇をおいておくことは重大な罪悪なのです。それは陛下が王であることによって神の御姿を表現し、神が憎まれるすべてのものを憎まねばならず、そののみか、神以上に憎まねばならないからです』聖人が王に言った言葉に従って、王は蛇を殺し、蛇が死から免がれようとするいかなる知恵も計略も役立ちませんでした」

〔挿話15終り〕

狐がこの寓話を語り終えた時、雄牛は再び非常に強く唸ったので、その土地全体が震え、ライオンやその他の獣達もとても怖がった。狐は王に、もし陛下がお望みなら私はあの奇怪な声を出す獣の所へ行き、王の前に連れて来て王と親しくさせられるかどうかやってみましょうと言った。王とその他のすべての獣達は叫んでいるあの獣に狐が会いに行くという企てをととても喜んだ。狐は王に、もしこれから会いに行くあの獣が王の宮廷に入りたいと言うならば、王が宮廷での安全を保証し、だれもあの獣を傷つけたり暴力を加えたりしないようにと頼んだ。王は全顧問団を前にして狐に、狐が要求したことすべてを保証した。

狐は雄牛のいる牧場へ行った。雄牛は狐がやって来るのを見て、とても喜んだ。2匹は親しくあいさつを交わし、⁽³⁴⁾狐は別れてから起こったすべての出来事を雄牛に話した。「友よ」と狐は言った。「あなたは王の前に出頭し、恭順の意を表わし、動作によってとても賢人であるふりをしなさい。あなたは長く王の領国の外にあって、とても後悔しているという様子を見せなさい。だから、人間の所に行き、また他の王国に暮らしたことに対し、みんなの前で王の許しを乞いなさい。そうして、友よ」と狐は言った。「王と全宮廷の前で、王や全顧問官があなたの言葉と行動を喜ぶように振るまいなさい。そうして人間の状態を王に助言しなさい」

雄牛と狐は王の宮廷へ行った。王と諸侯は雄牛と狐がやって来るのを見て、王と他の者達はその獣が雄牛であることを認め、怖がったことは馬鹿なことだったと感じた。また王は、雄牛があんなにも大きく高く、恐ろしげな声を出せるものかと驚いた。雄牛は王に、主君に対する礼をし、

王は、元気かと雄牛に言葉をかけた。雄牛は人間に仕えていた時に起ったことをすべて語った。王は雄牛にたいそうお前の声が変わったので驚いたと言った。牛は、王と全宮廷を捨てて立ち去り、長い間、他の王国にいたために恐怖と悔恨のために吠えていたのですと言った。また、恐怖と悔恨は私の魂を震わせ、恐怖と心配と驚きのために声が変わり、恐れと自責の気持ちが心からほとばしり出ているからですと言った。雄牛は王に赦しを乞い、王は全宮廷の人々の前で赦しを与えた。王は雄牛に人間の王の状態を尋ねた。雄牛は、世界中で最も邪悪で嘘つきな獣は人間であると蛇が言ったが、それは本当ですと言った。ライオンは雄牛にどうして世界中で人間が最も邪悪で嘘つきの獣と言ったのか、その訳を話してくれと言った。

註

- (1) 小西茂也訳『艶婦伝』第2講第3章、上巻 250～252頁（新潮文庫版）
- (2) Galmés 校訂版第1巻17～22頁に『驚異の書』の写本と刊本についての詳細な解説がある。
- (3) 原典は el Leó, el Lleó の両方の綴りを使用している。
- (4) 原典は Servo, Sero, Cèrvol の3つの綴りを使用している。
- (5) フランス語訳は Chevreau すなわち「仔山羊」としている。
- (6) 原典は Na Renart, Na Renard の両方の綴りを使用している。また狐になぜ女性人称定冠詞を用いているかについては理由が不明であるが、中世カタルニア語の狐を意味する volp が女性形であるためという説もある。しかし物語の中では、狐は男性のように行動している。なお、フランス語訳では le Renart と男性扱いされている。なお、イスパニア語訳は la Zorra で女性形である。
- (7) 原典は l'Ors, l'Os の両方の綴りを使用している。
- (8) 原典は el Leupart, el Lleopard の両方の綴りを使用している。
- (9) 原典は la Onça, l'Unça の両方の綴りを使用している。「雪ひょう」と訳した Onça (学名 Panthera Uncia) は、ヒマラヤ山脈、チベット高原、アルタイ山脈等アジアにのみ住む猫属の動物である。しかし欧州中世においては、かなり想像上の動物と見られ、壁掛けや紋章によく用いられ、『狐物語』の中にも現われる。
- (10) 9世紀欧州では司教は司祭、修道士、貴族、商工業者で構成された集会により選挙で選ばれた。11世紀から司教会（聖職者会議 el capítulo）で選ばれるようになった。
- (11) 原語 sagristà (sacristán〔西〕), 欧州中世では現在と違い、「聖器係僧」は聖器を保管する故に高い権威と地位を持っている。現在では最下級の聖職者の地位に落ち、昔話の中では「無知」と「文盲」の象徴的人物としてしばしば現われる。
- (12) 原語 l'erquediacha (el archidiácono または arcediano〔西〕), 中世では助祭長、すなわち筆頭助祭が教会の財産を管理しており、しばしば司教のあとを継いでいる。
- (13) 原語 lo cabiscol (el capiscol〔西〕), この原語およびイスパニア語は、現代では「合唱団長」

の意であるが、中世では大伽藍附属の学校の長を意味した。フランス語訳ではこの部分が *doyen* すなわち「僧会長」となっている。

- (14) イスパニア語訳では「ライオン」の後に「熊、雪ひょう、虎、ひょう」を付け加える。
- (15) イスパニア語訳ではこのあとに *el Tigre* 「虎」が付け加えてある。虎は原本には全く現れない動物である。
- (16) 原典は *el polli, el poltre* の両方の綴りを使用している。
- (17) フランス語訳はこの個所が, *pour ce qu'il lui avoit aucunement nuit* すなわち, 「ライオンの王の選出に少なからず妨害になったので」となっている。
- (18) リュイの時代はまだ馬肉が人間の食糧として使われていなかったと思われる。
- (19) フランス語訳にはこの「山羊」の語はない。
- (20) 原語では *hòmens* (*hombres* [西]) 「人間」という語を使い, この動物寓話に 1 度だけ人間が現われる。
- (21) 原典は *la serp, la serpent* の両方の綴りを使用している。
- (22) 「それ故」以下のこの文章はフランス語訳にはない。
- (23) 原典は *l'Aurifany, l'Orifany, l'Arifan, l'Oriffan, l'Elefant* 等の綴りを使用している。
- (24) 「王とその顧問官達」以下の 1 節はフランス語訳にはない。
- (25) 原語 *cambrer* (*camarero* [西]), 王の住居にあって, 身の回りの世話をする職。
- (26) 原語 *porter* (*portero* [西]), 元来は王が旅行する時, 王の宿舎の安全を守る職。
- (27) 原語 *juglar* (*juglar* [西]), *R. Menéndez Pidal* の定義に従えば, 「公衆の面前で, 公衆を楽しませて生活の資を得る人々」(*Poesía Juglaresca y Juglares, Colección Austral No. 300, p. 12*) である。歌ばかりではなく, 曲芸, 舞踏なども行ったので, むしろ, 「大道芸人」に近い。
- (28) 原語 *alduff* (*adufe* [西]), イスラム教徒が伝えたタンバリンに似た太鼓, 現代カタロニア語は *alduf*。フランス語訳では単に *tambour* 「太鼓」と, イスパニア語訳は *timpano* 「チンパノン」としている。
- (29) フランス語訳は単に *ci près* 「ここから近い」とする。
- (30) 「多くの芦と多くの泥」の代わりにフランス語訳は *moult de caves* 「多くの洞穴」であり, イスパニア語訳は *muchas cañas y bobas* 「多くの芦としだれ柳」となっている。
- (31) 原語 *puig*, フランス語訳は *montaigne* 「山」, イスパニア語訳は *pozo* 「井戸」となっている。
- (32) 原語 *spines* (*espinas* [西]), イスパニア語訳はこの前に *las escamas* をつけ加え「鱗や骨」としている。
- (33) 王が神の使者であるという思想は中世には一般に信じられていた。
- (34) この 1 節はイスパニア語訳にはない。